

『今月の天候と農作業』

通巻第5577号
3月号
平成27年 2月 28日発行
宮 崎 県
宮 崎 地 方 気 象 台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%、日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%、2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 2月28日(土)～ 3月6日(金)

前線や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 3月7日(土)～ 3月13日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<3週目から4週目の予報> 3月14日(土)～ 3月27日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 育苗管理

緑化は通気性のある被覆資材で2～3日遮光し、温度管理は日中は25度まで、夜温は15度を確保します。かん水は午後に行うと床土温が下がり多湿となるので、午前中に行います。過湿時は必要ありません。

硬化は10度以下の低温や25度以上の高温に遭うと、ムレ苗や苗いもち等が発生しやすくなるので注意します。田植え7日前頃から外気に慣らします。

2 本田準備

ほ場の漏水が激しいと水温が上がりにくく、肥料や除草剤の効果も不安定となります。また寒波時の深水対策も難しくなるので、代掻きは丁寧に行い、畦の補修を行います。基肥施用時期は早過ぎると成分が減少するので、できるだけ代掻き頃とし全層に鋤込みます。

3 病虫害防除

いもち病対策として田植前に薬剤箱処理を行います。購入苗では既に処理済みの箱もあるので確認します。また苗箱に除草剤を誤散布する事故に注意します。

4 移植作業と除草対策

寒波時は無理に移植せず日延べし、移植後は深水で防寒します。栽植密度は、有効茎（穂数）を確保するためにも、極端な疎植は避けましょう。

除草剤は、散布時期や水深で効果が左右されます。軟弱苗や強風時の散布、浅水で拡散が不十分な時は薬害が発生しやすくなります。ラベルを熟読し適切に使用し、散布後7日間は落水せず管理します。

◆ 麦 類

雨が多くなるため、周囲や畦間に排水溝を設けます。

赤かび病が多発しやすいので、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（蒴殻抽出期）に防除し、天候を踏まえその7日後頃にも行います。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

3月は日増しに日射量が増え、気温が高くなり、作物の蒸散量も多くなるため、かん水量を増やしていきます。一方、1回のかん水量を多くすると、通路の溜水等によりハウス内の環境や作業性が悪くなるため、かん水間隔を短くするなど1回のかん水量は変えず、多回数とすることで全体のかん水量を増やすようにします。また、日中は内カーテンや遮光資材を利用することで、日射量を調節するとともに、十分換気を行いハウス内の温度が高くないように注意します。夜間、気温が高い場合には内カーテンを開放し、ハウス内の適温管理に努めるとともに、加温機や循環扇で送風を行い、葉や果実の結露防止に努めます。

◆ きゅうり

強い日差しにより葉温が上がり、蒸散量も多くなるため、葉の老化が早まるなど草勢低下につながりますので、午前中は内張ビニルを利用し、強い日射を弱め、湿度を確保します。また、ハウス内温度が32度を超えると果色が淡くなり、果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。

◆ ピーマン

日中のハウス内気温が35度を超えると開花時の授粉がうまく行えず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながりますので、十分換気を行い、ハウス内が高温多湿にならないよう管理してください。また、気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、こまめに収穫することが草勢維持につながりますので、最低でも3～4日間隔での収穫に心がけましょう。また、白果も増加しますので、混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行います。

◆ トマト

ミニトマトは気温上昇にともない、裂果が増加するので、かん水量に注意します。土壌水分の急激な変化が裂果の主な原因ですので、少量多回数のかん水を行います。また、空中湿度を下げるため日中の換気を徹底し、一日おきに収穫を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を増や

します。また、草勢が低下すると小玉果が発生しますので追肥が遅れないように注意します。

◆ いちご

温度は出来る限り生育適温に近づけ、低温管理をこころがけます。ハダニ類が平年に比べ多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

ほうれんそうや小松菜等の葉菜、ごぼう、下旬から沿海地ではオクラの播種期になります。育苗が必要なものでは、キャベツ、深ねぎなどがあり、作付計画を立てて適期に播種します。また、トンネル栽培では日中の気温が高くなるため換気作業を徹底しましょう。

◆ スイートコーン

トンネル栽培は間引きの時期となります。本葉4～5枚の頃に健全で揃ったものを1株に整理しましょう。マルチ内が乾燥する場合は畦間や株元への灌水を行ってください。

また、ハウス栽培や大型トンネル栽培で、雄穂抽出期を迎えるものについては、雄穂が出始めたらチッソ成分で5～6kgを追肥しましょう。

◆ らっきょう

上旬は追肥の時期となります。球の肥大と生育促進のためチッソ成分で2～3kg程度を遅れないように施用しましょう。また、球の緑化を防止するため併せて土寄せを行いましょ。

◆ さといも

マルチ栽培は早生種の植付け時期です。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋(30～50g程度)を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆ 食用かんしょ

トンネル栽培では換気作業を徹底します。苗床は温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎ、健苗の育成に努めます。

◆ ジャがいも

品種や種芋の月齢によって違いますが、芽数が多いと着生する芋数が多くなり、芋が小さくなりますので、芽が出てきたら早めに1株1～2本に整理します。

◆ しょうが

4月に植付け予定の普通栽培では、欠株をなくし生育を揃えるための催芽の時期となります。催芽は20日間程度行います。幅120センチ、深さ15センチの溝を作り、種しょうがを2段重ねして並べ、吸水させたワラで覆い、10センチくらいの厚さに土をかけ、その上をビニルで覆います。なお、催芽は1センチ以内とします。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用しましょう。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが効果的です。また、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

今年は着花量が少ないことが予想されます。発芽後に、花の着生の無い枝を、前年枝の基部から除去しましょう。

◆ 完熟きんかん

収穫が終了したら、縮間伐・剪定の時期です。枝が隣接樹に当たりだしたら縮間伐を行いましょう。剪定は、樹勢や樹齢を考慮し、主枝、亜主枝の配置を考えながら、樹冠内部まで日が当たるようにしましょう。

剪定の遅れは、枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くします。

剪定は4月上旬までには終わらせましょう。

◆ 日向夏

3月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来日向夏は減酸を確認してから収穫しましょう。

◆ マンゴー

果実の赤色の部分を増やすために、果実のつり直しを行い、緑色の側にも光を当てるようにしましょう。

3月になると、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

2 落葉果樹

◆ 梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生します。予防や初期防除を実施しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋ギク

7月出荷作型の挿し芽を上旬から行います。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天の午後に採穂します。「フローラル優香」は系統によって特性が異なりますので、系統特性を把握し栽培管理を行ってください。6月出荷作型の「フローラル優香」は消灯前後を問わず生育期間全般での低温が貫生花の発生を助長しますので、電照期間中から気温を確保するように努めましょう。また、「精の一世」については親株時の低温で幼若性を獲得している場合があるので、定植後から12度程度で加温を行いましょ

◆ スイートピー

今年は秋の高温等の影響により、草勢のバランスを崩している状況が見られます。植物の状態をこまめに観察し、適切な肥培管理で草勢の安定化を図りましょう。液肥の施用に当たっては、根を傷めないように高濃度の液肥

の使用は避けましょう。

3月に入ると気温の不安定な日が増えてきますので、細やかな温度管理に努めるとともに、花卉の花しみや灰色かび病の発生を低減するため、十分な換気とともに、微生物農薬の使用や除湿のための送風を行いましょ

う。下旬から採種の交配期になります。採種を行う株は必ずつる下げを行い、かん水は控えめにしてください。

◆ デルフィニウム

沿海地域では3番花の出荷時期になります。気温が上昇してきますので、軟弱にならないよう昼間の換気は十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等も行いましょ

◆ ホオズキ

8月出荷作型の植え付け期になります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは適期に行いましょ

◆ ラナンキュラス

3月に入ると気温が上昇し、開花が早くなるため、気温に応じ切り前を調節します。日中の温度管理は収量確保のため15度程度を目安にします。

(中村 広)

畜産

今月は気候も暖かくなり、家畜にとっては生産性が向上する時期ではありますが、気温の日較差が大きい季節でもあり、特に朝・夕の冷え込みには十分注意が必要です。夜間はカーテンを閉め切り、舎内温度を確保しますが、気温が上昇する昼間はカーテンを開けて空気を入れ替えを行いましょ

◆ 家畜防疫対策

鳥インフルエンザについては、国内における新たな発生はなく、一応の落ち着きをみせていますが、依然として野鳥などの侵入リスクは高い状況にありますので、ウイルスを農場に侵入させないように、緊張感を持って侵入防

止対策の徹底に努めてください。口蹄疫についても、韓国では発生がみられており、消毒の徹底や長靴交換など、衛生対策をしっかりと行うことが重要です。なお、これらの衛生対策の取り組みは、その他の呼吸器病や消化器病等の対策にもなることから、家畜、家禽の生産性向上が図られます。

◆ 家畜の飼養管理

今月は、季節の変わり目で外気温の日格差が大きく、家畜が体調を崩しやすい時期となります。このため、朝夕の畜舎カーテンを開閉や、換気扇による換気、細霧による湿度管理等を行い、舎内の温湿度環境を整えるようにしてください。また、病気の発生時に早期対処ができるように、家畜の健康状態の観察を徹底しましょう。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10度になる頃を目安に実施します。整枝の高さは、葉層を8割以上確保するように、去年の最終摘採面から3～5割上げた位置としてください。また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽にかからない高さで丁寧に整枝してください。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性の肥料を施用します。

いずれも地域の施肥基準に準じて、うね間だけでなく株元近くまで幅広く散布し、流亡防止と分解促進のために、うね間を軽く攪拌します。

3 防霜対策

防霜を開始する時期は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整枝した茶園では春整枝直後からとし、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3度、一～二葉期は5度、二葉期以降は7度とします。スプリンクラーで防霜する場合は、摘

採面の気温が2度以下になったら散水を開始するようにしてください。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除時期は2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるように散布してください。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は2月下旬～3月中旬が適期ですが、ハウスなどの施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が良いでしょう。なお、ペーパーポット苗を定植する場合は、定植後の乾燥防止のためポットの上部が植穴より上に出ないように注意してください。

6 チャトゲコナジラミの発生の確認

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の葉の裏に寄生していますので、茶の葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子(あまこ)での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になりますので、なるべく晴天を選んで日和子(ひよりこ)で採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取します。採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぎます。特に雨子(あまこ)は素早く処理します。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、本畑の移植が主な作業となります。品質・収量の確保に向けて健苗の移植に努めましょう。

1 移植は、葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）の白い根が肥土全体に覆っている根張りの良い苗を選んで行いましょう。葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾（葉数減少）を招きやすくなります。

植穴は、深さ13～15センチ程度に揃えましょう。極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因になります。また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因になります。移植後は、移植苗の確認手直しを行い、活着促進に努めましょう。

2 移植後の管理作業として、排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めましょう。

黄斑えそ病の発生が懸念される場合は、防虫ネットの設置や協同防除に向けた話し合いを行い、発生防止に努めましょう。また、マルチ片の回収袋を設置し植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時に発生がなくても本田で早期に発生する恐れがあるので、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	並	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。 1月下旬調査では水路での生貝率が高かったため、水の出入りにネットを設置する等して侵入を防ぎます。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病 黄化えそ病 (MYSV) ミキイロアザミウマ	やや少 並 やや少 やや少 前年より少 なく、前々 年より多い 並	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改 植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するアザミウマ類、コナジラミ類などの微小害虫に対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、害虫類の防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや少 並 並	斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	アザミウマ類 タコナジラミ類	やや多 やや少	両害虫とも、今後暖かくなるにつれて増加する恐れがあります。特にアザミウマ類の発生が多いところでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 黄化葉巻病 (TYLCV) タコナジラミ類	やや少 並 並 やや少	葉かび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、早期に根ごと抜き取り適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミ類の防除も徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類 * アブラムシ類	並 並 やや多 やや多	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうち定期的に防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
カンキツ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 やや少 並	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 生育密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。

- 1) *は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。
- 4) 短期暴露評価の導入により農薬の使用方法が変更になるものがありますので注意してください。